

【研究ノート】

## ワ語方言からみた正書法

山田 敦士

### 0. はじめに

中国雲南省西南部に居住するワ族（漢語名：佤族）は、伝統的な表記習慣をもたない民族集団である。しかし 20 世紀以降、二種類のローマ字表記法（宣教師式、政府式）がもたらされ、現在、一部の集団に文字使用の実態が生まれている。

本稿では、上記のうち、政府式のローマ字表記法に焦点をあてる。同表記法は中国建国後に政府主導で作成されたもので、およそ四十年の試行期間を経て、2011 年にワ族の文字として正式に承認されるに至った。そこで以下では、同表記法の概要を述べるとともに、これまでのフィールド調査および現地高等教育研究機関における研究滞在をとおして得た知見<sup>1</sup>をもとに、同表記法使用の場で観察される諸問題について報告をおこなう。

### 1. ワ族とワ語

本稿の考察対象は、中国の公定民族の一つ「佤族」である<sup>2</sup>。その居住地域は、図 1 に示すように、メコン川以西のミャンマー国境沿いに限定される。

#### 1.1 言語学的にみたワ族

言語系統の観点からは、ワ族の言語（以下、ワ語と呼ぶ）は、同じく中国の公定民族であるブラン族（漢語名：布朗族）の言語（ブラン語）やドアン族（同：徳昂族）の言語（ドアン語またはパラウン語）とともに、モン・クメール語族パラウン語派を形成する（亀井ほか 1992）<sup>3</sup>。

ワ語はそれ自体に数多くの下位集団を内包する（山田 2009: 15）。以下に、集団の自称と方言区分の関係（表 1）、方言区分と分布、人口（表 2）について示す。



図 1. ワ族の分布図

表 1. 集団の自称と方言区分

方言区分	集団の自称
I 群	アヴウ、ヴオ、ルヴィア etc.
II 群	パラウク、パガウク etc.
III 群	ヴァ、タイロイ、ラー、モンホム etc.

表2. 方言区分と分布、人口

県名	I群			II群			III群	
	西盟	孟連	瀾滄	滄源	双江	耿馬	永徳	鎮康
ワ族人口 (人)	46,589	22,302	44,888	104,766	10,007	31,123	17,257	6,481
総人口比 (%)	71.91	27.48	11.43	84.35	7.93	17.02	6.53	5.41
主要民族 (多い順)	ワ ラフ 漢 タイ	タイ ラフ ワ 漢	ラフ 漢 ワ ハニ	ワ 漢 タイ イ	漢 ラフ ワ プラン	漢 タイ ワ ラフ	漢 イ ワ プラン	漢 ワ イ リス

(全 29.85 万人：国家统计局人口和社会科技统计局編 2003 より作成)

表 1 の方言区分は周・顔 (1984: 100-153) などの方言分類と大枠として重なるものである。周・顔 (1984: 157) は、分布の広さおよび話者人口の大きさという言語外的状況から、II群中の自称「パラウク」をワ族の威信方言と認めたと述べている。実際、パラウクはミャンマー連邦においても多数集団であり、タイ王国北部へもその分布を広げている<sup>4</sup>。しかし、言語内的状況はこれと必ずしも同じではない。歴史音韻論的にみると、I群の諸方言がもっとも保守的であり、固有の言語特徴を多く残している。その一方、II群やIII群の諸方言は隣接する他民族言語に通じる新たな言語特徴を発達させている<sup>5</sup>。このように、言語外的に認められる典型（威信性）と言語内的に認められる典型（保守性）が異なることに注意したい。

## 1.2 ワ族の歴史的環境

中国雲南省からタイ王国北部にかけての東南アジア大陸部は、新谷 (1998) によって「シャン文化圏 (のちにタイ文化圏)」と名付けられた、歴史的にタイ族文化が卓越した地域である。当該地域では、支配者層であるタイ族の生活文化が prestige の高いものとして君臨し、被支配者層であった山岳民族はこれを様々なかたちで受容してきた。その典型が宗教 (小乗仏教) およびそれにとまなう文字文化の受容であろう。ワ族と親縁関係にあるプラン族やドアン族なども、従属したタイ系民族の文字を使用するに至っている。ワ族もタイ系民族と接触し、生活文化の各方面において多大な影響を受けた。しかしワ族の多くは仏教に帰依することなく、文字を使用するには至らなかった<sup>6</sup>。

一方、中華人民共和国建国にとまなない、漢族の政治的・経済的プレゼンスが急速に増大した。当該地域もその例外でなく、近年は、漢族およびその生活文化の流入が顕著になっている。今日、圧倒的な漢文化の影響の下、ワ族の生活も大きく様変わりし、言語生活においても、漢語とのバイリンガルが一般的になり、漢字を読み書きする能力が社会的に不可欠となりつつある<sup>7</sup>。

## 2. ワ族の文字

20 世紀になり、ワ族地区に 2 種類のローマ字表記法がもたらされた。一つは宣教師式の表記法（以下、旧ワ表記法）であり、もう一つは政府式の表記法（以下、新ワ表記法）である。

旧ワ表記法は、1912 年に入植したプロテスタント宣教師によって、布教を目的として作成されたものである（周・顔 1984: 154）。

図 2. 旧ワ表記法（讚美歌の一節を抜粋）

Yaok Yaw Ceu Kau Yesu Hkawm U-ik.  
*All Hail the power. S. & S. 203.*

1 Yaok yaw ceu kau Yesu hkawm u-ik,  
Kawn cau Si Yeh krup Naw,  
Veh hwet mok si si mehang pa mawm,  
Kok Naw Si Mehang pehang u-ik.  
Veh hwet mok si si mehang pa mawm,  
Kok Naw Si Mehang pehang u-ik. (以下、省略)

この表記法は今日まで、ほとんど普及をみせていない<sup>8</sup>。その要因について、王（1994: 286-291）や趙（2006: 334-335）は、(1) 政治的要因（植民地主義による侵略行為への反発）、(2) 言語学的要因（文字と音韻の非対応）、を指摘している。

### 2.1 少数民族言語政策と新ワ表記法

一方の新ワ表記法は、建国後の少数民族政策の一環として制定されたものである。

中国政府は、1949 年の建国の後、すぐさま少数民族に対する大規模な調査に着手した。調査は民族や言語文化、歴史などの多方面においておこなわれた。言語調査の結果は民族認定の一基準とされるとともに、無文字民族に対する表記法制定にも利用された<sup>9</sup>。パラウクが威信方言と認められ、新ワ表記法が制定されたのもこの時期である<sup>10</sup>。

図 3. 新ワ表記法（陳・王 1993 による「生活様式」部分を抜粋）

1, NDEE OUD MGRONG GOUI

Hag diex nyiex yaong Ba rāog, njiad oud gah bīang mgōng,  
ngāig mgōng ndēe si ndōm. Yām njāeh būi dix bang laih nblaih  
yaong, būi ran dix sōg kaux mōuig nbīang gaing dix, būi gon bīh  
mōuig yūh glong si vēui, dom mōuig hmom, būi dom sum nyiex  
sang yaong. Nyiex mōuig nbīang gaing oud bīang yaong blag ndom.  
Būi dang sōg ndēe oud bag mgūang nyiex yaong dix. Yām ndīx, būi  
gon dang mgūah mee lūg rū, dīx rū oud dīx nbaoh. (以下、省略)

李（1999: 281, 286-293）によると、1957 年から今日までのおよそ 40 年間（1966-1980 は中断期間）、様々な機会を通じて、同表記法の普及がはかられてきた。特に滄源県を中心とする II 群諸方言の分布地域においては、識字教育を目的とした訓練講座がたびたび実施されている

(李 1996, 1999)。その成果として、例えば「パラウク方言地区の 7 割は文盲を脱した」(李 1999: 292) といった報告がなされている<sup>11</sup>。なお、同表記法は 2011 年に正式にワ族の文字として承認を受けている(中国社会科学院民族文学研究所 2011)。

## 2.2 新ワ表記法についての先行研究

新ワ表記法に対する先行研究は少なくない(周・顔 1984、王 1994、顔 1996、李 1999、趙 2006 など)。しかし、その大部分は(1) 正統性(政治的価値)と(2) 科学性(言語学的価値)を論評することに終始しており、その使用実態に言及したものは見当たらない。この二点は前述の旧ワ表記法に対する批判の裏返しでもあり、半ば公的な見解とみることもできる。

## 3. 新ワ表記法の諸問題

筆者は 90 年代後半からのフィールド調査および現地高等教育研究機関への研究滞在(2003 年 10 月から 2004 年 10 月まで)をとおして、新ワ表記法の使用実態に触れる機会を得た。以下では、その際に確認された同表記法にかかわる問題・課題について報告をおこなう。

### 3.1 表記と標準性

ある言語集団に文字表記を導入しようとする場合、言語内部で統一的扱いを受ける「標準語」の設定が必要である。標準語の導入に際しては、言語内に存在する種々の方言群のうちから社会的代表性をもつ方言を選び出す方法、また方言資料を検討して一種の人工的な言語を生み出す方法などが考えられる。

新ワ表記法は、前述のように、パラウク方言を基礎として制定されたものである。しかし、これは母語話者に「標準語」性の感覚が共有された結果ではないようにみえる。例えば、筆者の調査経験では、I 群の孟連県のルヴィア方言話者はパラウク方言の存在をほとんど認識していない。またパラウク居住区と近接するIII群のモンホム方言集落(永徳県)においても、パラウク方言を併用できるような話者に会ったことがない。実際、I 群とIII群の各地においては、標準語教育や識字教育が継続的におこなわれていなかった。

このように、言語使用の観点から、パラウク方言は必ずしも標準語として十分に機能していない様子がうかがえる。

### 3.2 表記発音化

上述のように、I 群やIII群に属する諸方言においては、パラウク方言が標準語として十分に機能しているわけではない。その一方で、正書法の基準とされたパラウク方言内部においては、表記発音化の問題が確認されている。

表記発音化とは、正書法の確立による「規範性」が、本来あるべき音声的特徴を覆い隠してしまうことを指す。以下に、2004 年にパラウク方言内の識字者に対し、新ワ表記法の読音調査<sup>12</sup>をおこなった際の事例を挙げる。

表 3. 新ワ表記とその読音

	新ワ表記	想定される音価 (標準音)	実際の読音
(1)	giam	[kiæm]	[kiām]
(2)	giab	[kiæp]	[kiāt]
(3)	gian	[kiɛn]	[kiān]
(4)	giad	[kiɛt]	[kiāt]
(5)	giang	[kiāŋ]	
(6)	giax	[kiāʔ]	
(7)	giah	[kiāh]	
(8)	nyieχ	[niɛʔ]	
(9)	gied	[kɛt]	[kiɛt]

上表 (1) から (7) のローマ字表記-ia について、後続子音に基づく次のような音韻規則が存在する。

-ia      →[iā] / -ng[n], -g[k], -x[ʔ], -h[h]  
           →[iɛ] / -n[n], -d[t]  
           →[iæ] / -m[m], -b[p]

しかし筆者の読音調査では、(1) から (4) はすべて[iā]として観察されている。これは単にアルファベットどおりに読み下した可能性もあるが、一方で表記-ie との差異化をはかろうとする規範意識による可能性もある。新ワ表記法による-ie は (8) のように、硬口蓋音ののちに[iɛ]と実現されるはずだが、(9) の軟口蓋音後にもこれが確認された。-ia と-ie は表記が異なり、発音上も区別されて然るべきと判断されたとすれば、(4) が[iā]のように実現されるのも不思議はない<sup>13</sup>。

このように、アルファベットどおりの読音であれ、過剰な一般化の結果であれ、表記が音声実体に影響を及ぼしている様子が見てとれる。

### 3.3 子音の表記

次に、方言間にみられる音韻的差異によって、新ワ表記法の使用に混乱が起こる事例を挙げる<sup>14</sup>。一つ目は、母音の表記にかかわる事例である。

パラウク方言を含むⅡ群の諸方言においては、閉鎖音系から摩擦音、鼻音、流音にいたる幅広い音素に氣息性の有無に基づく音韻対立が存在する。Ⅰ群の諸方言は、音声実体こそ異なるものの、多くに二項対立をもつ点は変わらない。しかし、Ⅲ群の諸方言においては、無声閉鎖音系に対立が存在するのみで、前二者と体系を大きく異にする。

表 4. 子音の二項対立

		無声閉鎖音系	有声閉鎖音系	鼻音	有声摩擦音	流音
I 群	A	[p <sup>h</sup> ]	[mp <sup>h</sup> ]	[mm]	—	[l̥l]
	B	[p]	[mp]	[m]	[v]	[l]
II 群	A	[p <sup>h</sup> ]	[mp <sup>h</sup> ~mbf̥]	[mf̥]	[vf̥]	[lf̥]
	B	[p]	[mp~mb]	[m]	[v]	[l]
III 群	A	[p <sup>h</sup> ]	—	—	—	—
	B	[p]	[b]	[m]	[v]	[l]

表 4 のように、I 群と II 群は、音声実体こそ違うものの、二項対立を保持する点において共通する。そのため、子音の表記において格段の不便が生じることはない。しかし III 群に属する話者は、標準音である II 群よりも対立が単純であるがゆえに、区別に困難が伴う。実際の書き取り調査でも、III 群の協力者すべてが、国語である漢語にも存在しない有声閉鎖音や鼻音、摩擦音、流音の二項対立を完全に再現することはできなかった。

### 3.4 超分節的要素の表記

もう一つの方言間にみられる音韻的差異による混乱事例として、超分節的要素の事例を挙げる。

標準音とされるパラウク方言を含む II 群の諸方言においては、喉頭の緊張度に基づく発声法 (register) という超分節的対立が特徴的である。III 群の諸方言では、声調の違いへとこの超分節的要素による対立を発達させている。しかし、I 群に属する諸方言はこのような超分節的要素自体をもっていない。

表 5. 超分節的要素

I 群	II 群	III 群
なし	弛緩	低降調
	非弛緩~緊張	高降調

この状況は、日本語の無アクセント方言とアクセントが弁別的な標準日本語の関係になぞらえることができよう。超分節的要素を区別しない I 群の話者にとって、無規則にも思える超分節的対立を習得するのは極めて困難である。

## 4. おわりに

本稿では、2011 年に正書法として承認された新ワ表記法について、その総括の一環として、表記法を概観するとともに、実際の文字使用に際して起こりうる諸問題について報告をおこなった。本稿の考察はまだ予備的なものにすぎない。文字表記の問題は幅広い観点から検討されるべきものであり、今後も調査を継続し、様々な場において現状報告をおこなっていきたいと考えている。

最後に、ワ語を表記することについて、筆者の思うところを述べておきたい。正書法の制

定に際しては、何のための正書法かということが常に問題となる。新ワ表記法について、山田 (2011) は、その用途が政府広報等、非常に限定的である現状を指摘している。このような現状にあることを認識したうえで、筆者は2003年から2004年の現地滞在時に開催された非公式な研究会（仮族語言文化研討会）において、標準語を前提とした正書法を確立するよりも、ワ語諸方言に対して汎用性のある転写法の確立を優先すべきと提起した。当時は正書法批准への機運が高まっている中であり、提案は一顧だにされなかった。しかし、ワ族固有の言語文化が大きく変容を余儀なくされ、新ワ表記法の展望が明るくない現状にかんがみると、このような文字方策についても再考の余地はあるのではないだろうか<sup>15</sup>。

## 注釈

<sup>1</sup> 本稿で用いるデータは、著者自身のフィールド調査によって得られたものである。調査は、以下の研究助成による研究活動の一環としておこなわれた。

- ・国際交流基金（次世代リーダーフェローシップ）「中国雲南省に散在するモン・クメール系諸言語の記述的研究：領域論および動態的研究を見据えて」平成15年度（研究代表者：山田敦士）
- ・科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「北部モン・クメール諸言語の記述と言語接触にかんする研究」平成18-19年度（研究代表者：山田敦士）
- ・科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「北方モン・クメール諸言語の記述的・動態的研究」平成20-22年度（研究代表者：山田敦士）
- ・科学研究費補助金（基盤 B）「言語・文化調査に基づくイラワジ・サルウィン流域諸民族の歴史の解明」平成21-24年度（研究代表者：新谷忠彦）
- ・科学研究費補助金（研究活動スタート支援）「未解明ワ族支系に対する記述言語学的研究」平成23-24年度（研究代表者：山田敦士）

<sup>2</sup> 本稿の考察対象には含まれないが、この「仮族」と明らかな親縁関係をもつ集団が、国境を隔てたミャンマー連邦のシャン州、およびタイ王国北部にも居住している（Diffloth 1980, Shintani 2005）。経済的・文化的つながりも深く、相互の往来も頻繁である。

<sup>3</sup> 民族分類と言語分類は必ずしも一致しないことがある。例えば、プラン族の一部はワ語と認められる言語を話す。山田（2009）ではこれら諸民族、諸言語の連続的性格を考慮し、北方モン・クメール民族／言語あるいはワ系民族／言語と総称している。

<sup>4</sup> 新谷忠彦名誉教授（東京外国語大学）の御教示による。

<sup>5</sup> 指標として、東・東南アジア大陸部の諸言語に広くみられる歴史音韻変化（A. 音節頭閉鎖音の無声化、およびそれに伴う B. 超分節的対立の発達）を挙げておく。ワ語 I 群の諸方言では、（A）音節頭閉鎖音が無声化せず、（B）超分節的対立を発達させていない。II 群の諸方言では、（A）音節頭閉鎖音が無声化し、（B）喉頭の緊張度に基づく発声法の区別を発達させている。III 群の諸方言では、（A）音節頭閉鎖音が無声化し、（B）発声法から声調の区別へと超分節的対立をシフトさせている。

<sup>6</sup> II 群中の一部のワ族は仏教を受容している。李（1999: 278）はこの集団について、タイ系民族の文字文化を受容したと指摘している。しかし、これはあくまでも経典を読むためであって、自民族の言語を記すという用途ではないことに注意したい。

<sup>7</sup> このように、ワ族はタイ族と漢族という二つの文字文化圏に接するという地理的また歴史的環境にある。したがって、固有の文字をもつという積極的な意義は見当たらないものの、母語が文字によって書かれるということに対しては、特段の抵抗感がないといえるかもしれない。なお Scott（2009）は、山地民が文字をもたなかった点を積極的にとらえ、これを「盆地文化との差異化戦略である」とみなしている。この観点についての是非は稿を改めて論じることにしたい。

<sup>8</sup> 厳密に言えば、原初表記が普及していないということである。今日、海外で改良された旧ワ表記法が国内に再流入している（山田 2011）。

<sup>9</sup> その経緯については岡本（1999）に詳しい。

<sup>10</sup> 新ワ表記法の制定および改訂などの経緯については、王（1994）に詳しい。

<sup>11</sup> 筆者の体感では、これはいささか誇張された数字である。あるいはローマ字に触れた体験までも含めた比率の可能性もある。

<sup>12</sup> 調査は、実際に存在する音節タイプを新ワ表記として示し、5人の識字者に読み上げてもらうかたち

でおこなった。

<sup>13</sup> このような表記発音化は母音に顕著に観察された。その要因として、母音体系の複雑さが挙げられよう。パラウク方言は 9 母音体系であり、豊富な二重母音が存在する。個々の母音音素も特定の環境下で、幅広い異音として実現されるため、a, i, u, e, o の 5 つの文字およびその組み合わせによる表記が、結果的に、混乱を招くことがある。

<sup>14</sup> この事例は、識字教育を受けた経験をもつ各方言の識字者に対する書き取り調査に基づくものである。

<sup>15</sup> その際には、3.3 と 3.4 で指摘した子音と超分節的要素のほか、母音体系の違いも考慮しなければならない。Ⅰ群とⅡ群の諸方言は 9 母音の体系をもつ。しかし、Ⅲ群に属する諸方言のみ、後舌半広母音に円唇／非円唇の対立を発達させ、10 母音の体系をもっている。

## 参考文献

陈卫东・王有明 编 (Chen, Weidong&Wang, Youming)

1993 『佤族风情 (Nbeen Oud Mgrong Goui Gon Ba Raog)』 云南民族出版社

Diffloth, Gérard

1980 *The Wa Languages, Linguistics of the Tibeto-Burman Area Vol.5, No.2*

国家统计局人口和社会科技统计局 编 (Guojiatongjiju Renkouheshuhehuikejijongjiju bian)

2003 『二〇〇〇年人口普查中国民族人口资料』 民族出版社

亀井孝・河野六郎・千野栄一 編

1992 『言語学大辞典 第3巻』 三省堂

李向荣 (Li, Xiangrong)

1996 「『佤族文字方案』试行情况调查」『佤语研究』:309-318、云南民族出版社

1999 「佤文」『云南少数民族文字概要』和丽峰主编:277-293、云南民族出版社

岡本雅亨

1999 『中国の少数民族教育と言語政策』 社会評論社

Scott, James C.

2009 *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*, Yale University Press

新谷忠彦 編

1998 『黄金の四角地帯—シャン文化圏の歴史・言語・民族』 慶友社

Shintani, Tadahiko, L.A.

2005 "Austroasiatic tone languages of the Tai Cultural Area: from a typological study to a general theory of their tonal development". Shigeki Kaji (ed.) *Proceedings of the symposium Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena*: 271-292, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

王敬骝 (Wang, Jingliu)

1996 「关于佤文」『佤语研究』:283-308、云南民族出版社

山田敦士

2009 『スガノリの記憶:中国雲南省ワ族の口頭伝承』 雄山閣

2011 「中国雲南省ワ族の文字使用に関する社会言語学的考察」北海道民族学会 2011 年度第 2 回大会における研究発表、函館市地域交流まちづくりセンター、2011 年 11 月 13 日

颜其香 (Yan, Qixiang)

1999 「佤文工作的回顾与展望」『佤语研究』:407-411、云南民族出版社

赵岩社 (Zhao, Yanshe)

2006 『佤语概论』 云南大学出版社

中国社会科学院民族文学研究所 (Zhongguoshehuikexueyuan Minzuwenxueyanjiusuo)

2011 「云南 7 种少数民族文字获批为正式文字」[http://iel.cass.cn/news\\_show.asp?newsid=9409](http://iel.cass.cn/news_show.asp?newsid=9409) (最終閲覧日 2012 年 1 月 11 日)

周植志・颜其香 (Zhou, Zhizhi&Yan, Qixiang)

1984 『佤语简志』 民族出版社

(やまだ・あつし／北海道大学大学院文学研究科専門研究員)